



町田南地域  
九条の会

HP <http://home.a09.itscom.net/minami9>

ニュース発行  
2016年8月号外  
町田南地域九条の会  
(連絡先事務局)  
町田市小川4-7-23  
TEL/FAX 042-796-6684  
メール machimina9@a08.itscom.net  
編集責任者 立石憲市郎



原爆投下15分後に香焼島から撮影されたキノコ雲と避難する人々

広島、長崎への原爆投下から、71年目の8月を迎えました。1928年長崎県のりこの五島列島で生まれ、長崎師範学校時代に被爆した故山本典人のりこさん(2014年没)の被爆体験記「ナガサキ原爆を生きぬく」が、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館に貴重な資料として展示されています。

山本さんは亡くなるまで町田市つくし野に住み、町田南地域九条の会の呼びかけ人でもありました。教師を終えた後も平和教育に力を尽くし、平和の大切さを本に、また、紙芝居にして、子どもたちに伝えました。以下は被爆体験記の内容です。

八月九日・十一時二分  
太平洋戦争がはじまってまもない一九四三(昭和十八)年四月、私は小学校教師を夢みて、長崎師範学校予科に入学した。

そのころ戦況はいよいよ逼迫し、入学して二年後、私は勤労働員学徒として三菱兵器製作所大橋工場に動員され、鍛造工場(別称・鍛冶屋)に配置された。そこでは巨大な落下型ハンマーで真赤に焼けた金属片にドスン、ドスンと強圧を加え、魚雷の部品つくりに専念していた。工場内はもうもうと灰と黒塵が舞い上り、私は昼夜二交代制のきびしい労働の中でそれらを吸いこみ、いつしか肺浸潤を患っ

八月九日。この日は朝から青空がひろがっていた。朝食後、松本君を先頭に私たち十名の残留組に、大村市に転勤する先生の家財を大八車二台で運搬するよう仕事を課せられた。先生のご自宅に着くと荷物は積みだされるばかりに梱包されていた。早めの昼食をいただき長崎市特有の石だたみの下り坂をおりきつて五島町の電車通りにでた。十一時二分。強烈な閃光を

ナガサキ原爆を生きぬく  
— 平和と歴史の道を歩きつづけて —  
山本 典人



山本さん(写真)の絵本「嘉代子ざくら」を紙芝居に

浴びた。万雷が一度に落ちたよ  
うな地揺れと爆風でぶっ倒され  
た。空を見上げた。ま夏の入道  
雲のような雲がもく、もく、も  
くと近づいてきた。とっさに大  
地にうつぶし、目と耳を両手で  
掩(おお)って動かなかった。  
しばらくしてそっと目をあけて  
みるとなんと太陽は消え失せ一  
寸先もみえない。死の世界だ。  
まわりの家屋が崩壊し、屋根瓦

や窓扉が舞い落ちてくる。その  
暗闇の中でいつしよに荷車をひ  
いていた松本君の「山本君、山  
本君」とよぶか細い声がする。  
どのくらいいたっただろう。かす  
かにまわりがみえてきた。半裸  
の人びとが浦上方面から走って  
くる。  
「今だ、逃げる！」  
松本君と声をかけあつて脱兎の  
如く駆けだした。そのとき、隣

にいた挺身隊員が「助けてー」  
と泣きながら、私の脚にしがみ  
ついてきた。  
私は「放せっー」と渾身の力で  
その手を振りきった。  
百メートルも走っただろうか。  
咽喉がからからに乾いてたまら  
ない。道路脇の水道の栓をひねっ  
て、思わず叫んだ。「あつ、火  
傷しているっ」  
二人の裸出している顔、腕、  
胸に無数の火傷の水泡が隆起し  
ている。急に疼きだした。他の  
学友はどこへ逃げたのだろう。  
私は浦上方面から逃避してくる  
半裸の人びとの流れにのって、  
県庁坂をかけのぼり、西小島に  
でた。広大な木造建築の続く丸  
山遊郭の二階から寝巻き姿の遊  
女たちが手を振り嬌声をあげ、  
助けをもとめている。それを斜  
めにみながら一挙に石だたみの  
坂道を駆けのぼった。

夜になった。星が美しく輝い  
ていた。昼間の疲れと痛さで壕  
の中にもぐりこんで寝た。寝つ  
きは早かったが、夜中に痛がゆ  
くて目が覚めた。壕の外に出て  
市街を見下し愕然とした。数キ  
ロメートルにわたって浦上方面  
は紅蓮となって燃え上り、天を  
焦がし、火の粉は夜空に舞い狂っ  
ている。私は思わず「長崎は全  
滅だ」と叫んだ。

### 八月十日 母校に帰る

朝早く目が覚めた。壕の中の  
人たちににぎりめしをいただき、  
昨日避難してきた道を逆に母校  
にむかった。途中、臨時救護所  
で顔や腕にわか作りの白い薬  
をベタベタ塗ってもらった。左  
手は白布で吊るされた。県庁の  
窓という窓からは煙がでていた。  
浦上方面は見渡す限り瓦礫の  
砂漠だ。電柱は柱のままくすぶ  
り、樹木は根こそぎ倒され、一  
枚の葉っぱもない。荷車をひい  
ていた馬は横転し、ばんばんに  
ふくれた腹や四肢を天にむけた  
ままひっくり返っている。遠く  
三菱兵器製作所の屋根もねじま  
げられ、鉄骨だけになって波うつ  
て傾いている。  
警防団の人たちが黒焦げになっ  
た半焼けしたような死体の足首  
を細紐でくくり、引っぱって道  
の両側に並べている。大橋停留  
所の下を流れる浦上川には、水  
に浮いてゆっくり流れていく死  
体がある。水呑みにおりたのか  
岩場にうつぶしたまま動かぬ人  
もいた。

大橋駅から母校までの道のり  
は、いつも朝夕通学していた広  
い道路である。その途中に動員  
学徒として働いていた三菱兵器  
製作所大橋工場がある。さしも  
広大な工場も鉄骨は折れまがり、  
屋根は吹きとばされ残骸をさら  
している。道路をはさんでその  
向い側に白亜の殿堂として朝夕  
輝いていた純心高等女学校は跡  
かたもなく焼失していた。  
母校はこれらの建物の延長線  
上にあった。木造建築の食堂、  
寮舎、炊事場、音楽室、木工室、

### 母校にたどりつく



武道館などはすべて灰燼化。僅かに鉄筋三階建ての本校校舎だけが残骸をさらしていた。焼け跡の廃墟の中に先生たちが学生たちの帰りを待ちわびていた。そのなかで寮監長の森口先生は学生の生死をチェックしていた。「本科一年、山本、無事帰って参りました」

「おう、山本、生きていたか。よく帰ってこれたなあ。つらかったろう。痛かったろう」

森田先生の慈愛こもるまなざし、握りしめてくれたあたたかい手。

「先生！」

私も松本君も絶句し、嗚咽した。昨日からの苦悩と生還できた喜びがあわさって涙がとめどなくあふれた。

ほかの残留生は被爆した直後、爆心地を避け、遠回りの山越えで全員帰校していることを教えてくれた。

先生たちの指示で学校近くの森に避難した。そこには重傷の歴史の矢野先生が、血のにじん

だタオルを額にまいた石畑校長の手当てをうけていた。ほかに熱傷に堪えている三十名ほどの学友たちが横たわっていた。誰ひとり声を出す人はいない。私もそこにつかれきった体を休めた。

しばらくして動ける者は郊外の長与国民学校に再避難するよう指示がでた。私たちは民家の雨戸で担架を作り、重傷の学友を乗せて四人で運んだ。埃っぽい田舎道を二キロメートルほど運んだころだ。担架が急に小刻みに揺れた。学友をおろして見た。学友はいっそうの痙攣（けいれん）でゆれたかと思うと「ガクツ」と大揺れして動かなくなった。

「死んだッ」

と学友が悲痛な声で叫んだ。

改めて担架の上の顔をみつめた。焦げて茶色っぽくむくんでいる。顔がよくわからない、名前も告げず、肉身にも看とられず、ギラギラ照り輝く太陽のもとで死んでいった彼。

とで死んでいった彼。

処置にこまっていると地域の警防団の人たち数名が「浦上方面に犠牲者の救助にいく途中なので、師範学校まで運んであげますよ」という。弱りきっていたのでお願いした。

### 長与国民学校にて

おそらく母校でも名前もわからず、肉親の立ち会いもなく茶毘（だび）にふされたことである。夕暮れの中でたどりついた長与国民学校校庭には数枚のテントが張られ、被爆者はその中で体を横たえていた。師範生は体育館の中にはいるようにと指示がでた。私は学友たちと入館し、頭を並べて横たわった。異臭が鼻をつき、「痛い」「かゆい」などのうめき声がきこえてくる。ここにも充分な薬品はなかった。私はいつのまにかねむっていた。目が覚めたときは外はまっ暗くなっていた。

ぐらされ、灯管制がしかれていた。看護婦が回診し、苦痛を訴える被爆者を励ましていた。私の近くに横たわっていた学友が苦痛を訴えたときのことである。回診してきた看護婦が学友の顔に懐中電灯をむけた。とたんに学友はガバツとび起き、「爆弾だ！ やられた！」と叫び、走り出し、バタツと倒れた。彼がこの世に残した最後の動きであり声だった。名前も告げず、遺書もなく、肉親にも会えないで他界していった。このあと二人の看護婦がはいつてきて、手早く死体を担架に乗せ、運んでいった。そのまま茶毘にふされただろう。この夜も、数人の被爆者が他界し、看護婦に運ばれていった。

### 大村海軍病院

「すべての病末には清潔な敷布がひろげられ、手術器具は消毒された」「繃帯はうす高く積まれ、救急注射の準備も整えられた」「烹炊所（ほうすいじょ）では数百名分の粥食が焚きだされた」

号笛をうならせながら自動車が病院玄関前に到着し、被爆者が担架でおろされた。患者たちの顔面は黒焦げ、一部の表皮は剥離して赤い血の滲む皮下組織を露出し、頭髮は褐色に焼け縮れ、着衣は一人残らず裂け散り、男女の性別すら判別不可能、何をたずねても応答はなく、わずかに呻吟呼吸するのみである。

原爆が投下された日の夕刻、大村市長から大村海軍病院院長・泰山弘道氏に「長崎市の被害甚大。貴病院で一千名ぐらいの負傷者を収容するよう手配された

私たちが長与駅から最寄りの岩松駅に到着したときは、病院側の準備は万端に整えられていた直後だった。駅には師範学校女子部の学生四人が組をつくって十数組以上、待ちかまえるようにして重傷の学友を担送して

体育館内には遮光幕が張りめ

いった。軽傷の私たちはその後歩いて続いた。

太田正君と私は軽傷を理由に、重傷の矢野先生らの付添い・看護をする条件で、将官級の特別病室に収容され、ベッドまで与えられた。

まず病院では洗濯のきいた青い患者服が給付された。朝夕の定時刻には、手押しの医療車を押しながら、軍医・看護婦数人が回診にみえた。今まではどんな火傷も文句なしに赤チンキをだけ塗られていたが、ここではリバノールを加えて塗られた。ヒヤツとした感触だけで火傷が治っていくように思った。

矢野先生の深手火傷には、わり箸では挟めないほど微少のうじが発生した。それが一晩で火傷の肉をくい荒し、成虫蛆となって蠢(うごめ)いていた。空襲警報になると矢野先生はきまって「ああ、かゆいんだ」「がまんできないんだ」と悲鳴をあげた。太田君と私はその度ごとに矢野先生に肩をかき避難した。さらにわり箸でうじ虫を

一匹一匹は喜んで薬品入りのビーカーの中に投げ入れた。

八月十五日

### 敗戦・重大及送

正午に重大放送がある。ベッドに正座して聴くように、という伝令がまわってきた。緊張してきいたがラジオの雑音で言語不鮮明。廊下にでて耳をすました。ここも天皇の異様な音声だけが耳に残った。白衣の下士官たちが「戦争に負けたんだ」などと沈痛な声でいつていた。その旨を病室の先生たちに伝えた。先生たちは「日本の行く末はどうなるのかね」「兵隊の横暴だけはなくなるだろう」などとささやいていた。

母校の校長室では敗戦を知らされた石田校長(動員学徒の御長男被爆死)は「だまされた! だまされた!」と怒声を発し、御家族全員を失くされた森田先生や増本先生は「無条件降伏するなら、なぜもっと早くしなかつたか!」と卓をたたき男泣きした、という。

その夜、病院の遮光幕は取りはずされ、煌煌(こうこう)と明かりがともりまぶしかった。やっと戦争が終わった実感がわいた。

二十日。ベッドに仰臥していた太田君は母親の涙声で目を覚ました。おかあさんは苦勞に苦勞を重ねて、やっと生きていた息子を探しあてた安堵と変わり果てた息子の姿をみて涙を流しているのだった。

おかあさんは五島で渡海船をチャーターし長崎港に上陸、足を棒にして焼跡の師範学校や怪我した師範生が入院していると、この病院、臨時救護所等を探しまわったが息子の居所がわからなかった。が、四日目やっと大村海軍病院に収容されていることをつきとめた。汽車で一時間ほど離れた大村の果ての海軍病院に収容されているとは夢にも思っていなかったという。

おかあさんは担当軍医に息子を連れて帰りたいと懇願し、「帰郷許可証」を私の分までとりつけてくれた。お別れをかね

て学友を見舞った。激痛に耐え、病床に伏している先生や学友の姿をみて後髪をひかれる思いで病院をあとにした。

汽車は長崎にむかつて走った。車窓に緑濃い山や段々畑、棚田が走馬灯のように移り変わっていく。終着駅が近づくと一望瓦礫と化した原子野があらわれ、あの日の惨状と苦悩が甦った。死に絶えたのか、犬猫の鳴き声も全くない。

大波止(おおはと)地名)に出た。チャーターしていた渡海船は、太田君母子が数日たつても姿をみせないで、キャンセルして帰島してしまつた。長崎市と福江市を結ぶ「長福丸」は航行中アメリカ力機の銃撃をつけて以来欠航中という。太田君が「佐世保港から帰島する船」の情報をつかんできたので急遽佐世保港にむかい、頼みに頼んで便乗させてもらった。

船は五島にむかつた。船上に横たわり手足をのばした。機銃掃射の恐怖もなければ、空襲の

心配もない船路であった。戦争・原爆は遠い、遠いむかしのような錯覚に襲われた。戦争がない平和っていいなあ、そんな思いが胸いっぱい広がった。

空は底ぬけに青く、海はどこまでも広い。そのなかをかき分けるようにして船は小刻みにエンジン音を震動させながら突き進んでいった。

夕刻、船は島に着いた。太田君の家に一泊し、翌日、一日一便の小型船にのりかえわが家にむかつた。はるか遠くの学校住宅の田んぼの草とりを四つんばいになってとっているのはまがうことなき父であった。

「父ちゃん、帰ってきたぞー」私は大声で叫び、右手を高くあげた。つと立ち上つた父は、長男の私だと知ると、田んぼの中をまっすぐに飛んできて、泥だらけの両手で私を抱擁し、「生きとつたかー」と声をあげて泣いた。私も泣いた。父の泣き声と涙をみたのは、あとにも先にもこの時一度だけである。